

■ チャイコフスキー／交響曲第4番へ短調 Op.36

チャイコフスキー（1840-93）の「運命交響曲」とも呼ばれ、広く親しまれてきた交響曲第4番は、作曲家が36歳の年に完成された。第2番から第4番までが3年ごとに作曲されているのに対し、第4番と第5番の間には10年の歳月が流れている。途中にマンフレット交響曲が挟まれてはいるものの、この間には組曲が多く作曲された。いわば第4番は初期の交響曲と後期をつなぐ転換点の役割を果たしているのである。

作曲されたのは結婚が破局して不幸な結果となり、同時にフォン・メック夫人からの援助が始まった時期。身边が気ぜわしい中、スイスからイタリアへの旅行で落ち着きを取り戻し、集中して書き上げられた。メック夫人に捧げられ、彼女への手紙では作品に秘められた標題が説明されている。以下、適宜、手紙の言葉を引用して、曲想を説明しよう（手紙の翻訳は森田稔『新チャイコフスキー考』より）。

第1楽章はアンダンテ・ソステヌートの序奏で始まる。ホルンとファゴットが吹くファンファーレを作曲家は「運命」と呼び、「幸福へ到達しようとするわれわれの熱望を妨げる、あの宿命的な力です」と述べている。モデラート・コン・アニマの主部は「ワルツの動きで」と記されたソナタ形式。第1主題は「絶望的な気持ちますます強く、ますます痛烈に」なるのに対し、第2主題は「夢が少しずつ魂を満たして」いく。第2楽章アンダンティーノ・イン・モード・ディ・カンツォーナは三部形式。「夕方、一人腰かけて、仕事に疲れ、本を手にとってもそれが手から滑り落ちてしまうような時に姿を現す、あのゆううつな感情」と表現されている。オーボエのメロディが主部の主題で、中間部は少しテンポが速くなり、長調の舞曲風の楽想となる。第3楽章アレグロは弦がピチカートだけで演奏されるスケルツォ。「少しお酒を飲んでほろ酔い気分になった時、脳裏をかすめる、気まぐれなアラベスク」。変拍子も取り入れ、遊び心が感じられる。第4楽章アレグロ・コン・フォーコは「民衆のお祭り騒ぎの場面」。自由なロンド形式によるフィナーレで、活気あふれる第1主題で始まり、第2主題にロシア民謡「野に立つ白樺」をそのまま使っている。「我を忘れて、人の喜びの場面に引き込まれそうになった瞬間、しつこい運命が現れて、注意を喚起」する。ちょうど第1楽章の動機を第4楽章で再現する形で、第5番の交響曲で試みられる全楽章の主題的統一への先駆けとなっている。最後は熱狂的な喜びのうちに終結する。

白石 美雪